きぬ／＼川（女仙後記）

泉鏡花作

一

午飯の支度は鮎の鹽焼に鮴の汁、古風な塗膳の禿げたのに、碗も皿も佗しいけれども、川魚は泳ぐのを其の儘で料つたやう、鮎は聞えた名品である上に、きぬ／＼川も此の邊は、市から川沿の村の數、六つを越えて七ツめのはづれ、湯の山に手の届きさうな上流であるから、其の丈疊の目十二、十三と算するのが、反を打つて、箸にはツと一薫るのを、鵜呑に舌鼓を打つて、軍曹と、巡査と、最う一人、絽の紋着に袴を穿いた、三名澁い酒を早や五六本。

「あゝ、可い心持だ、川風が又そよ／＼して、てんと極樂、東下りと見える、此の姉さんの唐紅の安繪具が、ちらつく工合といふのはない、」と巡査は後ざまに手をついて、打仰向きながら、壁貼の石版繪の端を吹いた。

「はゝあ、大分草臥れた美人ですな、こりや餘程

雨漏に遣られたやうだが、我々は何うも照りつけられて草臥れ切つた、道程は大したことぢやあないが、棒端から此方、分けて此の二つさきの、何とかいひました、彼の村から此の劍までの石隗澤山の大でこぼこと來たら、何うです。ひよろ／＼歩行くうちは宛然大波に揺られる形だ、尤も昔から、一本歯の足駄で、此の先の媛神杜までお參詣をすりや、大願成就としてあるんだからね、いや、驚かざるを得ませんよ、」と紋着はぐツたりの形。

軍曹は、大胡坐で、

「執事君、君、まづ其の袴を取らんか、査公も、草鞋穿ぢやつたが、肴を見ると上り込んだといふもんぢや、緩りやらう、うむ、壮に飲まう。何うぢや、次手に別嬪のお酌があると言分なし、遣らせようではないか、何うせ傍に控へて居るもんぢや、うむ別嬪、一番酌をしてくれんかね、」と濁聲をかけて、無遠慮にじろりと見返る、簀の子の縁の端近う、座を下つて、暑さに消え入りさうに悄然と、葡萄棚を小楯にして、薄い膝に手をかさね、差俯向いた面ざしの、涙ぐむまで愁はしげなるは、小間使のお巳代、單衣の衣の汗ばんだのも、弱々しい状には重さうな、

其れのみか、些と幅を廣く、紅の扱帯を胸高に、乳の下のくびるゝばかり、確乎と結んだ色の、塵も留めず鮮かなのが、風情に添うて花やかならず、霜を染めたかと其の果敢なさ。

もの言はれても答もせず、袂の端を取上げて、爪探りながら口を結ぶ。

「氣輕に謂ふことを畏まつて、はいと酌をするやうな婦人なら、何も恁うやつて御苦勞千萬な、此處等下りまで出向いて來るには當りませんや、優しい顔をして居る癖に、恐しく強情で、から、すね切つて居るんですからな、命じたつて駄目ですよ。」と執事は冷かに言つて、開け擴げた窓越に、流の方へ頤を向けた。

軍曹は朱の如き目を（（目争））り、

「また十ばかり引ばたくか、うむ、姉さん温順にせんと昨日のやうに、ぎうと取ちめるが何ないぢやい。」と厚い唇で舌なめずりす。

巡査は杯をつゝと獻して、

「いや、夫婦松のお邸の中とは違つて、邊鄙でも

往來です、無法なことは出來ません、其にさ、血の涙で徳利を持たれて御覧じろ、此の惡酒だもの、立處に毒と變じまさ、ねえ、執事さん。」

「然やう、まあ、我慢してお重ねなさい。」と酌をしながら、紹の羽織は向き直つて、

「おい、巳代、せい／＼呼吸を切つて居ながら、こんな處まで引張り出すにや當らんぢやないか。眞前に圖星をさゝれる、實家へお隱し申したわけぢやあるまいが、令室の在らつしやる處を、き様の知らんことがあるものか、又さ、今時や、雪靴を穿いて出たつて、お邸の庭でさへ踵の剥けさうな姫様育ちが、兎に乘つて飛びやしまいし、湯湧谷なんぞへ遁げるものかい。」

二

「何うだ考へて見ろ、私たちだつて恐れる路だ。然も炎天に、き様、迚も女の足で、歩行かれやせんぞ、雪賣の親仁とやら、炭賣の婆とやらに、聞いたことがあると言つて、令室は川上の湯湧谷へお隠れなさつたとばかり、吐すもんだから此の騒だ。

今もいふ通り、迷兒の兎が負をして駈けたら知らず、お雪様の身體で、何うして此の湯の山道を、一足だつて歩行けるものか、何うです。君、」

「全くさ。」と巡査は立膝の上に猪口を据ゑる。

「はゝあ、何でも可え、撲つて白せろ。」と軍曹は、早やとろんこの目を瞑つて、大口に鮎を横ぐはへ。

「困つちまふ！　何かといへば、殺せの死ぬの、活きるのと、手古摺らせること夥しいや、今も此の飯屋の奴等に聞いたけれども、四五日の暑さで、飛脚も通らぬと言ゝみではないか。

白いものと、赤いものは、人間の身體には着かぬものと思つてらい、此處等ぢやあ。

上の方になれはなるほど、流は急だし、外に通る處はないのに、奥様が彼の容色で、あの姿で歩行いて見ろ、的切片輪車に上膓が乗つて通つた位の噂をすら、お邸に大切なお客があつて、園遊會を遊ばした、其場から行方が知れぬのぢやないか。

巳代、き様だつて、何なに目立つと思ふ、巡査が居るから恐いと見えて、近くへは寄つて來ないが、戸外はワツ／＼といふ人だかりだ。」

「呀！　筵圍の野雪隱の前へ、どしこと集りやあがつたな。おや／＼、此家の内の夫婦に、子供まで顯れてら、何も自分の内を外から覗かなくツても可さゝうなものだ。おゝ、石魂の上へ腰をかけたのがあります。炎天に驚いた、暢氣なもんです。」と巡査は苦笑をしながら、膳のふちを箸でこつ／＼。

「可い加滅にいつちまへ、」と執事は荒らかにいつた。

「巳代、」

「は……い、」

「湯湧谷なんざ嘘の皮だらう、うむ、」と呻つて、軍曹も斜に睨みながら、軍服の肩を聳かした。

巳代はものおぢして、膝に置いた手を其のまゝ、上前の褄を押へながら、竦めた身をあとへ退いて、

「全く、あの、私は何にも存じはいたしません。何でございます、此の山の中へお入り遊ばしたと申しますのさへ、うろんな位でございます、而して、奥様がおいで遊ばした先を申上げて悪い、と思ひますりや、ねえ、皆さん、」と口惜しさうな顔を上げたが、唇の厚いのと、目の細いのと、一寸髯が、三方から瞳を集めたので、叉俯向き、

「私や、私や、打たれましたつて、」といひさして、震ふ袖口を目にあてる。

「心柄だな。」と執事は投げたやうにいふのである。

下ぶくれな頬が見え、袂の中で頭を振り、

「否、どんな目に逢ひましたつて、令室のお為に悪いことを、殺されたつて言ひはしません。御前様や皆さんがお尋ね遊ばすより、奥様をお懐しくつて私の方がお顔が見たいのでございますもの、お在遊ばす處を知つて居て、言はないわけはないぢやあり

ませんか。何うぞ最う、いろんなことをおつしやるのは堪忍して下さいまし、私や眞個に何うすれば可いか、途方に暮れて居りますものを、」と聲も切々に打怨ずる。

「いや、事實でせう。大都會とはわけが違ふ、此の市中のことです。地圖を開いて見るよりも確な警察で、僕をはじめ彼の位探したが、何處の物置にも、押入にも、況や蚊帳の中などにです、お邸の奥様が隱してあらうとは思はれん。

のみならずですね、奥様が見えなくなつたと同時に、お邸の裏口だ、朝六ツ橋の向うに居た除隊の騎兵が一名と、本人の身に着いたもので、鐵砲が一挺と、これだけ見えなくなつたといふことまで、探索が届いて居るのですから、巳代がいふ、其の山へ隱れたのが嘘ぢやありますまい。」

三

巡査は尻上りの言葉を繼ぎ、

「事實あの晩、全體の市に移動のあつたのは、第一奥様、其の騎兵と、鐵砲一挺です。其の外には警察へ、煙草入の遺失屈一ツ出ないんです。僕たちの方で其だけ行届いて居りや、目こぼしなし、別に他に見當のつけやうもないんですからな、兎も角巳代のいふことを信ずるより仕方がありません、幾度もいふことなんですが、」と言ひながら、椀の底に殘つた二尾ばかりの鮎と一所に、汁を飯の上へぶつかけたが、傍見をしい／＼餞舌つて居たので、其のこぼれかゝつた指を嘗めて、

「何うです飯にしちや、日は長いが、まだ大分にありますから、」

「飯にするかな、否、何の路此處まで繰出したもんだから、突留めるまで行つて見るにや、見るんだがね、此の通りだ。」と執事は伸上る身で窓を見越す、ぶツかいたやうな大岩が、目の前に蟠り、流に押冠さつて、連つて、土塀を築いて土も留めず、草も置かず、日の光でキラ／＼して、唯見ると大な

る炎の塊。

「何です、此の上を何處までも傳はつて行くんだと言ふぢやありませんか。未だまあ流があるだけに、何うか恁うか別條はないやうなものゝ、野中でゞもあつて御覽なさい、如何なる英雄も忽ち卒倒だからね。媛神杜の前から戸外通の本道を行けば、ずツと廻つて此の先田舎道三里は手酷しさ。」

「尤も些と位苦しくツたつて、河べりの間道を行くのです、軍曹、軍曹も矢張吶喊に御同意でせう。」

「然ればぢや、」と何を見るともなく、顔を眞正面に据ゑて、軍曹は肩を揺つた。

思ひがけず巳代が屹と面を上げた。活々としたものいひで、

「何うぞ近道に遊ばして下さいましな。」

「無論だよ。」と巡査は直に應じたが、執事は黙然として不言、窓ある方に傾けた髯の尖が、もう些と長くツて岩に觸れたら、ぢり／／とでもいひさうに、頬を押へて大いに痺む。

軍曹も生欠伸をして、諸臑をぐいと伸し、

「私も吶喊より、此の場で潔く討死ぢや。」

「飲足りますまい、」と執事は掌を下へ廻して、頤を空ざまに掻撫でる。

二人の状を、巳代は手をついたまゝ、涼い目を（目爭）つて見て居た。

「はゝあ、戰は凡て輜重の如何にありぢやね。」

「何うだ、」

「何うだつて、仕様がありませんな、二人とも最う歩くのが、厭になつたんでせう、可い加減に草臥れた處へ、此の温氣で、おまけに惡酒を呷つちや堪りつこはありやせんです。」

「いや、何うも全くあぐみ切つた、大頭痛、戸外へ一寸顔を向けても燒灰をかぶるやうだ、恐しいこつた。」

「萬端私は最う討死ぢやよ。」と軍曹は蛇が落ちたやうにどたり仰向、臀と肩でどた／＼と、其の長蟲の蜒る如く、頭押に巳代の方に擦り寄つて、

「醉うては枕すかい、蠅除に蚊帳を釣つて、此處へごろ寝は何うぢや。」

「敗軍となりましたな、私もこりや野武士に鎧を剥がれたくなつて來た。」

巡査は茶を注ぎながら又苦笑。

「手も着けられん、だから酒を飲むのはお止しなさいといつたのに、第一軍曹なんざ買つて出た役ではないんですか。」

「あの、皆さんに眞に濟みません、何でございますなら私一人で參りまして可いのでございます。」

「馬鹿なことを、き様に遁げられて堪るもんか、一人で遣つて可いくらゐなら、はじめから誰もついちやあ來んわ。

詰らぬことを……ちよツ口だけでも餘計に利かすない。」と取つても附けない。

「いや、恁うしませう、此處等あとで又何して頂くとして、宜しいですか、いつもお世話になつてる僕だ。お二人で此處に休んでおいでなさるが可い、僕は何うせ其の用意をして來た位ですから、構ひません、一人で行きます、何うです、晝寢でもして、宜しいですか、緩り待つて居て貰ひませう。」

四

「巳代、き様飯を食はんのか。」

此處で一呼吸吐いた執事は、事が晝寝に極ると色を直して、良物優しく聲をかけた。

「私は澤山でございます。」

「澤山ぢやあない、食へ。あゝ、飯を食はんきや不可ん、此間から碌に頂かんぢやないか、途中で打倒れると、大變だ。」

「はい、否、氣が張つて居りますから、大丈夫でございますよ。」

「お茶漬にでもして、遣れるなら遣つたら可からう、話が極りや何でも疾いが可い。」

と巡査の、木偶が繰られるやう差上げた手に、脱いで置いた上衣の袖を通すのを見て、巳代は早や身を起して、片膝を浮かしたが、指のさきを疊について一寸猶豫ふ。

「可いかな、」と執事は頤を突出して、上目に見て念を入れる。

「はい、」

と上の空で返事をしながら、巳代は淺黄の板じめ

縮緬、黒繻子と打合せの帯の間から、懐紙を取出して、殆ど無意識であるかのやう、膝の上に差置くと、崩折れて坐つて歎息した。

巡査は其の肩のあたりに、丈高く突立つたが、跪いたる如き、可憐な姿を瞰下し、

「便所か、」といつて件の人だかりの、向う側の筵戸に屹と目をつけると、ごろた石に腰をかけて居た、一番近いのが逸疾く氣取つて、ついと何食はぬ顔して退る。

「おい／＼、」

「いゝえ、冷水を少し頂かして下さいまし。」

「あゝ、水か、」

執事引取つて高らかに、

「水を持つて來い。」と呼んだ。

軒に吊した草鞋を楯に、朽ちた柱につかまつて、巳代の姿と座の状を、及腰に覗いて居た壯佼が、思はず、

「應、」と言ふと、ちやつと退つて、石高道を横飛びに、

「水ぢやとい、水ぢやとい、」と續ざまに傳へながら、筵戸の前なる八九人の中へ揉込むと、しばらくして、何處をこつそり廻つたか、庭口から茶呑茶碗を、盆にも乗せず、亭主が未だ雫する濡手に据ゑて、ひよつこり土間へ出てお辭儀をして、

「ひやあ、水といはつせえて、ござりやするでござりやするか。」と密と出し、差置いて茫乎立つ。

執事が横柄に、

「置いて行け。」

「ひやあ、」

「おい、水が來たぜ。」

「何うも、」といつた巳代は、二つに開いた懐紙の中なる、女持の紙入を、ぢつと瞶めて居るのであつた。

巡査は上から差覗いて、

「奥方から拝領のものと見えるね。」

これには答へず、

「眞個に何う遊ばしたんでせうねえ。」

ほろりとして、巳代は獨言のやうに言ひながら、

小さな錫の蓋を開けて見た、器は錆びもせず、白く新しく、綺麗なのに、紫雪がもう些とばかりになつて居たから、白齒にかちりと當てゝ、口に含んで、目を瞑つて仰向けに、島田の根をがつくりと、身に染むやうに半ば其の冷水を干して、扱帯の結目を押へなから、帯の間へ紙入を、鳩尾のあたりを掌で斜に壓したが、身を開いて立構へ、巡査の顔を見上げて待つ。

「可いか、」

「それでは執事さん、」

「心柄だ仕方がないわ。」

「危險なもんぢや、猫に鰹節ぢやからの、路で何をしよるか分らんが、」と先に藥の薫つた時、フイと寝返りして葡匐になつて、頬杖をしてじろ／＼と巳代を瞶めて居た軍曹。

「君ぢやあるまいし。ふゝん、」

「何ぢやね、氣をつけんとね、其の騎兵が、令室について居るとすると、鐵砲の一件だがね、」と執事は立つて、送出して、眞面目である。

「敢て恐れんです。」といぴながら、巡査は早や草履を結へつけて、土間に悄乎と立つて居る巳代を

見(み)て、眦(まなじり)を返(かへ)して其(そ)の蝙蝠傘(かうもりがさ)の、立(たて)かけてあるのに目(め)をつけたが、

「そら、」といつて草鞋(わらぢ)の爪先(つまさき)にかけて、ボンと蹴(け)つた。

五

「翳したら可からう、おい、其の蝙蝠傘を擴げたら何うだ、そしてどん／＼歩行かんきや可かん。」と巡査は岩角を踏んで足踏をして、

「泣いてちや困るぢやないか、何も人前があるから遣つたことを、僕が蹴つたものだからつて、翳せんことは無さゝうなもんだな。」

追立てられて辿る巳代は、前に立つたまゝ振向きもしないで、「私や、私や何うせ罪人扱にされるんですから、持物や何か何うなすつたつて、些ともあの其を厭ひはしませんけれども、何も繩をつけなくつても可いぢやありませんか、ねえ。」と口惜しさうに足許に支かつた蝙蝠傘の象牙の柄に、乳の下を押當てるばかり、差俯向いて身を顫はす。弱腰にきりゝと結んだ、黒繻子の帯の艶も、日に赤く見ゆるまで、日當りに、引添ふ巡査の身體だけ蔭になつた腰を屈めて、二筋の捕繩を、端短に取られて居る。

「誰も見ちやあ居らんから構やせん。」と巡査は澄していつて、背後を振返りながら玉なす額際の汗を拂つた。

日の稍傾く西の方に、人里は早や遙、劍村を出でしより、歩を移す二間に一尺、三間に五尺、嶮しい

路は次第高で、次から次の、岩から岩に攀づる都度、其の形怪に、其の状奇に、かよわい巳代の疲れた姿の、顔蒼く、唇白く、全身に汗を被つたのが、高く岩の上に顯るゝに從うて、戸は隱れ、廂は落ち、屋根は沈んで、やがて村を圍ふ樹の梢も低くなつて、既に半道ばかりを來た。

途すがら岩また岩、其の或者は灰色に、或は淡く赤く、或は薄く黄に、また緑に、樺に、紺青に、ともすれば踵のあとを印するまで、—灰を吹き出したるがあり、岸破と缺けて刻々に、眼を刺す如き光を射出すのもあつた。此の色すべて墨を以て一刷はいたやうに沈んだのが、大崩に水に落ち、飛々に流に散つて、倒にかへる泡白く、唯見る雪の塊を投げたやう、

躍り起し、潜り抜けて、岩と岩との間を狂奔して、低きに落つる水上の水は、恰も絶壁斷崖の飛瀑を足許に横たへたるやう、流は唯一に、凄じく、冷く、蒼く沸立つて、兩岸二筋の岩山が、碎けて流るゝかとあやまたるゝ。

腰縄の無慙な巳代は、現世のことゝも思はぬけれども、年少き女の身の、

「人が見ませんたつて、私やこんなに為れましては、死ぬより辛うございますもの。」

巡査も太息を吐きながら、

「だからよ、一寸したことが死ぬより辛いんだ。き様、死ぬのを何とも思つて居ないから、それだから、縛つて附着いて行くんぢやあないか、人質にでもとられた氣で居るかして、今も何うだ、串戲ではない、こんな所で、き様、ひどく倒れたつて尖がつた岩で胸をつくのに、水ン中へなんか飛込まれて堪るもんかい。」

「だつたつても、あなたが串戲ばかりなさるんですもの。」

「串戲ぢやないといふに分らない女だな。えゝ、眞個なんだ、僕は、だから然うすりや可いぢやないか。

巳代が遁げました、飛だことをした、ちえゝ！抜つたか何かで、空ツ惚けて歸つてさ、僕さへ承知なら憚ることはない、工合の可い所へお前さん隱れて居りや、當分の内だけで、後は何とでもごまかせ

まさ。

然うすりやお前、奥様の在所が知れようが、知れまいが、僕の構つたこつちやない。地體ね、巡査なんかして居るけれど、そりや時代といふもので、僕だつて譬ひ職掌であらうと、些あ懐工合があらうと、人の細君のあとを探しに出るな役不足なんだぜ。

それもお巳代さんといふあてがあるから、此の難行ださ、察し給へ、おもだつた執事だの、汝が好でやつて來た軍曹の奴が、劍村までゞへだぶれて、恁う二人ばかりになるといふのが、既に早や約束事と思ふがね。」

六

にや／＼と氣取つて笑ひ、

「何うだね、誰が又こんな所へ來るもんか、大丈夫だよ。おい、」と背中をぐいと突く。

巳代は身を揉んで、

「存じませんよ。」

「ちよツ、凡そ其の強情だから、き様事こはしだ、別に然う敵役あつかひにせんでも可からう。然う言つてるんぢやあないか、好んで奥様のあとを捜索するんではないツて、分らないな。えゝ、お巳代さん、もと／＼お邸の御門内に詰めて居る僕だから、豫て氣象も知つて居ようし、平生からだつて、何のことは分つてらあね。然もお前さんは怜悧だしさ。まあ、二人で氣の利いた二階でも借りようぢやないか、よ、おい、黙つて居ちや分らんよ、こら。」といきり立つて權柄づく。

唯最う口惜いから、

「厭ですよ！」

「うむ、勝手にしろ。」と磴と突くと、足も溜

らず、巳代はうつむけに轉ばうとして、危く支へた、胸の押に、白い柄が、つけもとからポキと折れて、蝙蝠傘は弓なりに曲つて岩へ、堪へず倒れようとする身を、巡査は、綱を衝と張つて取留めた。

巳代は屹と振向いて、

「あなた、餘り非道だわ。」と呼吸の下で判然といふ。

「歩行け、恁なりや、ぼツ立てるばかりだからな。」と半ば威しつけて又薄笑す。

巳代は其の顔の筋の弛んだのをじつと見て居たが、うつとりした面に情なう微笑んで、

「關さん、」

「えゝ、」と案外な形で、黙つて居て、しばらくして、

「關さんは大いに嬉しい、近頃にないね、凡て旦那だの、あなたゞから怨んで居たがね、」

「そりや何ですわ、人を懲役扱ぴになさるからですよ。」

「君の心がら萬やむを得んからさ、何か、其處

で、其の何か關さんなるものに御用かね。」
「あの私は眞個のことを申しますがね、今のやうな無理なことをなさるのなら、殺されても厭でございますけれど、」
ほッと切ない呼吸して、
「あの何ですよ、私もお願ぴがござんす、」
「へい、」
「否、何ですがね、それを聞いて下さいますか。」
「勿論、」と稍激して言つた。
「外のことぢやありません、後生ですから。私は屹度此の前へ參りましたら、令室にお目に懸るでせうと思ひますよ。」
「何うも然うらしいよ。其處で、」
「私は最う／＼お懐しくつて、一目お顔を見ません内は、死んでも死切れませんやうな氣がしますの。それですから、恁やつてひどい路を行きますのも、些とも苦にはしませんけれど、もし彼方へ着いて奥様がおいで遊ばしても、あなたお役目でせうけれど、ひよツとしてお邸へ歸りたくないとおつしやつたら、何うぞ、大目に見てあげて下さいな。然うすりや私は何なにでもなりますわ。」と其の涼しい目をばつ

ちりと、いつはりなき心の中の、瞳を通して見透さるゝやうに、目を（目爭）つていつた。よし其は兎も角も、恁る手弱女の身ひとつを、活殺乃公の手裡にありと、巡査は一呑にした色見えて、

「其の時の事さ、先づ承知だから、奥様の事は心配しないでも可い、しかしお巳代さん、お前の心意氣一つだからね。」

「はい。」

「最う一のしだ、あゝ、遣切れない。」

「殿方の癖に何でございますね、私さへそんなぢやないのですもの、」巳代は前途の崖を仰ぎ見つゝ、ものゝ勇ましげに立直つたが、フト見廻して便なさゝう。

「や、氣の毒なことをした。何またいくらも僕が杖のかはりになるよ。」

「何うぞそれよりか、ひよつとかして蛇が出ましたら助けて下さいまし、私はたゞそれが思ひでございます。」

「蛇か、うむ、蛇はうざ／／居る處だ、然も媛神

杜の女神様のつかはしめだと言つて、色の眞白なのがずら／＼さ、向う岸から一目見た日にや、お前さんの立つて居る其の岩だつて、根の方には繋つてるんだ。」

「えゝ！」と思はず寄添ふ。

「をつと、其心意氣、」と巡査は早速に手を取つたが、猶且つ繩尻を放さうとはせぬ。

七

やがて蛇紋岩といふのであらう、層状をなして大いなる暗緑色の丘の上に、先づ巳代の、疲れてなえたやうな單衣のひだが、岩に映つて、色蒼く、雪なす爪先に血さへ染んで、蹌踉いて顯れた、續いて巡査。

時に、途すがらものに遮られて見えなかつた。朝まだきから正午をかけて、過り來た沿岸の村又　村は其の森ばかりちらほらと、數も七ツ、遠き方は一面に荒海の浪を描いて、起伏凹凸里餘に渡る、湯の山の引いた幕の裾に、海松房の如き隈をなして、辿れば村はづれと、村はづれと、畷と、又畷と畷と劍村まで縦に、眞直に連つて居るやうであつたのが、今は七角に角立つてギツクリと七處。

後朝川の流の末、朝六ツ橋を架けたるあたりは、市の南の端から第一着の、燧村のさきに當るのであるから、舊來た路は爰に於て、恰も前途なる、湯の山の背後へ廻る姿になるので、環を描いて最も遠い、其の燧村が目の下に最も近く、近き程の劍村が、最も遠い處に瞰下さるゝ。

岩角に縋り／＼、此の間道を攀づる者の、ひゝらぎの枝を渡るが如き一條の險路は、谷川とゝもに足許を低きに流れて、じり／＼と蝉の聲の、焦げつくやうな氣勢のする、見ゆる限、りの市も村も、コンパスの軸のくるりと廻つて、人は唯これ居ながらにして、湯の山の入口といふ千枚岩に近づき寄るやう、一連の地盤は山を乘せて、次第に目前に來るのである。

俗に青鬼と名づけて恐るゝ、此の蛇紋岩の頂に彳んで、土地の變化の凄じさに、見る／＼目くるめいて、ふら／＼とした巳代は、あはれへ令室も恁る道をと、一度は思つたが、殆ど我を忘れた後は、自ら足の運ぶとも覺えず。

遠景を點じた村々の七ツの森は、一歩を前に運ぶに連れて、直ちに灰色の屏風に隱れた。流の面は忽ち低く、岩は益々大いに、山は愈々高く、島田のぴんのほつれたまゝ、爪尖に血を染めたまゝ、巳代の姿は小さく／＼、日除の白布横ざまに、繩尻を取つたまゝ、脊の高い巡査の身も、岩の破目に吸はるゝばかり、細く且つ微なるものになると、八ツ半なるべし、白日輪、崎嶇たる對岸の頂に落ちて、一山颯

と火の如く、岩々は色は鮮かに、緑と黄と相交り、朱と青と相混じ、灰なると墨なると、水に宿つて倒也。

蓋し色彩を施したる又これ山門の如きもの、辿り抜けると、路稍低くなだらかに、水も練絹のすら／＼として、一町ばかり、物静に、両岸左右に廣く開いて、山懐に楕圓形の谷一ツ縦に抱ける姿、頂は両方より特に天高く相接して、日の光も遮らず、冷い風も颯と吹く、此の突あたりの山の狭間、見る目には人一人身を横に通る位、纔に明く開いたのが、築き成せる巌の城門、湯の山の入口の千枚岩といふのである。

いま潜り抜けた眩きばかりの岩の木戸と、前途を塞いだ千枚岩と、ものゝ静かに安かなるは、纔に此の谷間ばかり。

石火矢幾門つるべ打つ、大叫喚の水の聲は、千枚岩の背後に聞えて、おどろ／＼と虚空に響き、そもいかなる岩、いかなる瀧、いかなる瀬とも計り知られず。

冷かに水氣を含んだ、風また一陣吹添ふ折から、裾袂打靡く、巳代を背後から追立てゝ、此の谷の半

ばを過ぎた、湯の山の門に近く、針よりも細く小さき巡査は、山のあまりの嚴しさを、仰いで、退つて、茫然として歩を留めた。巳代は人心地もなく首低れたるのみ。

八

「あゝ、姉さん一寸、」

一寸お待ちと清しい聲、岩清水の點滴を湛へた、路傍の石の窪に、我にもあらず跪づいて、口先づ自然の靈藥を飲まうとして、地に兩手を縋つた巳代、

「はい、」といつたがうろ／＼して、今呼んだのは若い婦人、と心付くと、つむりから氷を浴びたやうに慄然とした。

恁る言を此處に聞くべき數でない。

身を緊めて、小さくなつて、疎むと又聲をかけて、

「其を飲んぢやあ不可いよ。」といふはしに、裳の音すら／＼と、廻つて左手に彳む樣子に、巳代は恐る／＼顔を上げて一目見てハツとした、けれども尋ぬる令室より、心ばかり小造りで、年紀も一二ツ三ツ數へて少ない、然もおもかげの稍圓いのが、目立つて少く、目のばつちりと大い、眉の鮮かな、鼻筋の通つた、頬の薄い、撫肩の背後へ、黒髪を颯と流したのが、紫の襟を、深く合せ、黄昏に見る藤の花を、さながらの單の衣、同一色の稍薄い無地の扱帶を無造作に纏うたが、其の爪はづれの尋常さ、

手を懐中に差入れた、右手の膨らかな、雪の腕の、二の腕あたり惜氣もなう、斜めに片頬にかけて半面の眉、其半は隠るゝまで、しなやかにかざした手に、洗髪の艶の映る、そらだきの薫を籠めて、眞白な手拭で、岩のひだに碎けて射返す、まばゆき夕日影を遮りながら、巳代を伏目にうつむき見て、悠然として立つたる風采、見上げて俤をうかゞふ身には、ひたすら神々しいばかりであつた。

言ふべからざる威に打たれて、巳代は思はず手をついたが、求むれば與へられ、取縋れば抱寄せられ、悲しめば慰さめられ、詫ぶれば許さるゝ思がしたので、

「何うぞ御免遊ばして下さいまし、取のぼせて居りましたものでございますから、其に切なくつてなりませんので、つい、お斷り申しますのも、忘れまして濟みません。」

麗人はこれを聞くと、片足をあとに引き、胸をやゝ反して、莞爾として、

「何をいふのだらう、こんな處にある清水を、

神様のものだつて、鳥さへ、獣さへ、飲みたければ來て勝手にたべますよ。他愛のない、まあ、可愛らしい人だねえ。」といふ人の、却つて尊いばかりのあどけなさ。

巳代は一層、

「恐入ります。」

「然うぢやあないの、今此の水でね、私が髪を洗つたから、それだから飲むのはお止しといつたの、咎めたのではないのだよ。」

「え、お髪をお洗ひ遊ばして、それなら結構でございます、一口頂かして下さいまし。」

「お止しなさい、悪いから、ね、それにどん／＼流れるんだと可いけれど、こぼれるほど湧きかはるのぢやあないのだから、」

「否、」

「あれ、それを飲むと、お前、お腹が大きくなりますよ。」と世にも氣高う微笑みながら、力なげな、ものあはれな、恥かしさうな、巳代の顔をとみかうみて、

「大層苦しさうでおいでだよ、そしてお前、よくこんな處へ來られたことね。」

「はい。」
「一人かい。」
「いゝえ、一人になりましたのでございます。劍村と申します處までは三人附絡つて參りまして、それからは、一人だけつい此の四五町さきの、恐しい大きな岩が、門のやうになつて居ります處まで、放れないでついて來ました、私は何うせはじめから、死にましても可いつもりで參りましにけれども、それでさへ彼處は入りますのが恐しかつたのでございます。」と巳代は語りかけて呼吸をつく。

九

巳代が俯向いて一呼吸つく、砂埃には塗れたけれども、媚めかしい帯の間に、蛇が占めて殺すやう、繩が絡んで、ずるり一條。

瞳を見据ゑて麗人は、其の美しい眉を顰めたが、衝と寄り、翳して居た手拭で、上下に輕く塵を拂ひながら、左右の手で結目を解いて、

「お前、縛られておいでかい。」

「あれ、お手が汚れますわ。」と吃驚して心付いて、膝ざり出でて取らうとする。

「大事ないよ。」と麗人は手早く揉んで丸げ、一巻の塊にして、重のついたを、振返りざまに丁と後へ、はら／＼と解けながら、此の邊また靜に流るゝ、谷川の空に飜つた。見も返らず、其の手拭の片端を昏に銜へて掌を扱いて拭き、

「何故、何うしてこんなにされたの。」

巳代は伏拝まぬばかりにして、

「お嬉しう存じます、其の繩尻を取りまして、巡査が一人、彼處まで參りましたのでございます。」

「おや／＼此處へ、流罪ものにでもする氣か知

ら、」

「然うではないのでございますが、」と稍人心地に復したれば、姫神こゝにおはしますと、心に念じてうら問ふやうに、

「此處は、あの、何と申します處でございませう。」

「湯の山といひますよ。」

「それでは、湯湧谷と申しますのは、」

「それは此の崖の上、」と麗人は立つたまゝ、巳代は下に居て一所に空。崖の上と口にこそ言へ、仰ぐとうつとりと心ゆくやう、世を放れて、天に聳えた、其根なる、こゝに清水の湧く上には、里の夕に立のぼる煙の如く、煙に似て然も寒さうな、本は薄く、末濃の白雲岩間々々に湧き立つて、ちら／＼と、低きは淀み、上を行くのは流るゝやうに、蒼空に入亂れて飛ぶ、飛ぶ、飛、ぶ。

「もし、彼處へは上れませうか、道の酷いのは辛抱をいたしましても、參つて惡い處でございまして、御罰でも受けましたら何うしませう。今も申しまし

た、其の巡査は、あの石の門から、中へ入らうといたしますと、此の雲でございます。それとも温泉がございますなら、其の湯氣でございませう、急に霧がかゝりましたやうに、四方の眞黒な岩山が殘らず白くなつて、一杯に雲がかゝつたかと思ぴますと一ツ、恐しい鐵砲の音がしましたが、其時手を放してうしろへ倒れて了ひましたのでございます。私は夢中で駈出して參りました、急な流がございまして、それからあとはこんなに又平な路になりましたので、まあ、可かつたと存じましたが、何分切なくつてなりませんので、丁ど此處に水がございましたから、飛つくやうに飲みたくなつたのでございます。覺悟はして居りましたけれども、先刻の鐵砲の音は、山のお崇りかと存じます、でも何ういたしましても湯湧谷まで參りたいのでございますが、峠とは存じません、谷といひますから、もうこれからは、坂がありましたら下りるのでせうと安心をしましたのに、」

麗人は聞いて、頷いて、

「此處は水の流れる谷、此の上の湯の湧く處が、矢張谷、峠はずつと上にあるが、劍村の杜の方から本街道を廻つて行くとね、峠は路が遠いばかりで、

行くのにはやさしいさうだよ。湯湧谷が一番、行くのに六かしい、何、崇りも何もありはしないよ、此の水も同一で、鳥獣も住むものを、人が行つて悪いといふことはないのだけれど、此の通りの切立だから、」

と巳代の顔をぢつと見て、

「そして何か用なのかい。」

十

「はい御主人様を尋ねて参りますのでございます。」

「婦人の、」

「はい、」

「私くらゐな脊恰好、」

「え、御存じで在らつしやいますか、」

「そして此間爺やから白い兎を貰つた方、」

「まあ！」

「そんなら七日の晩から行方が分らなくおなりだらう、」と打明けた中にも恁うはと思はるゝまで、かくさぬものゝいひやうであつた。

此方は限なく力を待て、

「ちやうど朝六六ツのお邸に、六百里とやら放れました、遠方の都からお出で遊ばした大切なお客がございまして、宵闇に花火の上りました夜でございました。」

「お雪さんとおつしやつたね、令室は、座敷も庭も人いきれがして、煩いと、崖の樹の間から忍んで出て、裏手の、此の流の末だねえ、後朝川の岸が、

幸ひ暗、人に見つからないから隠れて涼んでおいでだつた。」

巳代は此の人の口から恁ることを聞くのさへ、早や訝しさに馴れたれば、然までには怪しまず、

「何うして御存じでございますえ。」

「山番の爺やが話したもの、こん度のことははじめから爺やがかゝり合だから皆知つてるよ。」

「おゝ、其の雪賣のお爺さんは、此邊にお見えなさるのではございませんか。」

「今日は、また市へ行きましたよ。」

「然やうでございますか、それでは貴女がもしお聞き遊ばして、御存じでございますなら、何うぞ令室のことをお聞かせ遊ばして下さいまし。あの、其の日は朝も早くから、お邸中混雑いたしまして、人手の多い内ではございますけれど、殿様が又お客様へ御馳走に、奥、奥と、四阿屋からも、庭からも、お茶室からも、お呼立てなさいますものですから、極暑の折でございませう、ぴつしより汗におなり遊ばして、お召ものは絞るやう、三度お着換へなさい

ました位、日が暮れましてから湯にお入り遊ばして、さつと流しておゆかたがけ、其處までは手が届きませんで、灯もつきませんお部屋の縁に立つて、やう／＼汗をお入れ遊ばすと、師團長とやら、旅團長とやら、萬歳とやら、何とやら、わあ／＼といふ客の騒、あの聲には逆上ると、耳をお塞ぎ遊ばす處を、又續けざまに殿様がお呼立てぢやございませんか。

私もお客たちに串戯をされますから、令室のお世話を楯に、お袖にかくれて休んで居りました。巳代私は最う厭だよ、とおつしやつて、おむづかり遊ばします。

御主人の蔭言を申すやうで濟みませんが、殿様は原お邸の御養子でございます所為か、故とらしい。然うでなくつては、御容色も、御心立も、其はもう、奥様とは此べものになりません、お妾を一人ならず、二人も三人も御寵愛なさいます上、時々はお邸へお連込みで、御客様あつかひ、床をうしろにお二方、奥様は下手へ下つて御挨拶をなさいます。私の方が口惜しがつて、蔭で泣きますものですから、そんな時は巳代ともおつしやらず、御自分お茶を注いで、妾面のお給仕をなさいますのでございます。

家附の女だつて、主人の權式は此通りと、奉公人にまで見得をなさる、そんな殿様をお持ち遊ばした、御兩親のない奥様は、お可哀柏でなりません。」

巳代は袂で目を拭ひ、

「それさへ、ついしか厭な顔もなさいません。其がなほほ氣に入らず、雪は何故悋氣をせんと、中の惡い私におつしやつた事さへございます。然うしちや一人で怒つて、主人が妾ととちぐるふのを見て、人間らしい顔もせぬのは、侮つて、馬鹿にし切つて、路傍の犬猫あつかぴにしをるからだ。養子には何がなる、早や密夫でもあるであらう、汝、今に見ろ、と恁うなんでございますのに、お取卷が大勢また、奥様には邪慳なものばかり。

何うするものでございます、御自分が惡さをして、悋氣をせんのは輕蔑ぢや、可愛いと思はぬからだ、他に男があるのだと、をんなのを何うしませう、」

麗人は黙つて聞いて居たが、冷やかなる笑を含んで、

「厄介な男だこと。」

十一

「否、それでも奥様は何とも思ひはなさいません、お人柄が立勝つた旦那様とは較べものになりませんのでございますから、苛め殺すやうなことをいつて暴れましても、まるで摩耶夫人様のおかけものゝ前で、醉ぱらひがふんぞつて、あの髯だらけな口から、沫泡を吹いて居りますとしか、見えませんくらゐ、氣にもおかけ遊ばさぬ。其様方でございますのに、身震を遊ばすほど、厭だとおつしやつたのでございます。

お見兼ね申しまして、私が、それではそつと裏門から出てお涼みなすつて在らつしやいまし。あんな處でもお邸内でございますから、私どもはそんなにも思ひませんけれど、夫婦松の朱塗の古家あたりから、土塀の際は、畫間でも人が通りませんから、花火見物に、どんなに人だかりがして居ませうとも、其は橋の上までゞございます。内の者も夜分では氣がつきませんでございませうと、お腰かけの床几を取りに行きたくも、見付かりませうと存じまして、芍藥の鉢植の並んで居りましたのを下しまして、其

の臺を持つて、おともをして、やう／／裏口へお出し申しました。

蚊が居りますから引返して、團扇と、お煙草を持つて參りますと、途中から飛つきましたか、それとも、お部屋のお籠の中に、其の日の取込ですから入れてお置き遊ばしたのを、連れておいでになりましたか、十日ばかり前から其はもう、ぴとつ寝をなさいませんばかり、お子様はなし、猫はお嫌ひ、白や、白やとおつしやつた、あの、お爺さんにおねだりなさいました、兎を丁と膝に抱いて在らつしやいますから、いゝお相手がございます、客が靜まりましてから、お迎ひに參りまする。それまでは何とでも申しては、私はお身體の入りますだけ、銅張の門を細くあけて、お手傳に引返しました。巳代頼んだよ、とおつしやつて、嬉しさうに、煙管をお取り遊ぱした、其のお聲も、お姿も、納めになりましたのでございます。

さあ、十時過ぎます頃から、お邸中、引くりかへりますやうな大騒ぎ。

勿體ない、日頃姉妹のやうにして、可愛がつて下さいました、直ぐに私を縛りまして、何でも知つて

居るに違ひないと、寄つて集つて、ぶつやら、蹴るやら、」

「あゝ、皆知つて居る、可哀さうに何にも知らないものを何うだらう、おさへ人がないと思つて、酷いことをする、今聞いた其お客といふのは、未だ朝六ツのお邸に逗留して居ませうね、一ツはそれへの御馳走にお前を庭前へなんか引出したのだよ、おとものの内に赭ら顔の肥つた軍曹が居るだらう、皆ね、磔のお仕置がなくなつたのを、残念だと思ふ人達さ。」

巳代に語るともなき状にて、麗人は手拭を確乎と取つて、青眼はたと凄かりしが、再び、

「よく此處まで來られたねえ、私が聞いた其のお雪さんのことを、今話して聞かせませうが、」

此の時、空の色蒼く澄んで、湧き出づる山氣収まり、夕日の名残の紅を劃つて、白き一帯の雲となつた、夏の日もやゝ暮れかゝる、湯の山の岩の肌は、濡れたる牛の腹の如く、しつとりとして冷えるのであつた。

「池へ釣棹を置いて來た、丁ど釣れさかる時分になつたから、大儀だけれどもね、もう些とさきまで

來ておくれ、あの、恁う切立てたやうな四角な大岩の角を向うへ曲ると、直なんだよ。お前歩行けようか、私は、よく話がお出來だと思ふ位だよ、身體は大抵ぢやあるまいのに、」

「はい、私も先刻此の水をのまうと存じました時分は、もう／＼目もくらむやうでございましたが、あなたのお姿を見ましてから、忘れたやうになりまして、」

「何ともないかい。」

「唯、自分の身體ではないやうに思ひます。それに節々と、此の胸の處が些と痛いやうでございますが、心は確でございますよ。」

「何うしてお飯も咽喉へは通らないで、折檻に遇つた上、此處とは違つて大熱の路を歩行いて來て、唯さへ弱い者が何でお前、もうね、身體は誰か預つて置いたものがあるのだから、今返さしてあげませう。」

と鷹揚にいつて、袖を合せた。

「其の水の中へ兩手をお入れ。」

十二

「あゝ、然うやつて、」

命ぜらるゝまゝに、巳代は背後向になつて手を浸した、石清水はひやりと氷よりも冷かに、血が凍るやうなので、思はず肩をすくめて手を引きさうにした。

「じつと堪へておいでなさい。」

と制し留められたので、齒をくひしばると、程なく冷さに馴れて冷々と、心爽かになるのみならず、二重の衣を隔つるばかり、背に近々と彳む人の、美しく尊き氣勢、膚に通り、骨に染みて、巳代はうごかない水面を、恍惚として見詰めて居ると、蔽になつた人の姿は、肩越に澄み切つた底に深く映つて、こゝで洗つたといゝふ黒髪は、濃かに其の薄い頰を籠めて、然も水中に、顏のやゝ蒼く、夜の色も切に迫つて、藤紫の衣も褪せ、扱帯の色も消えがてに、影、淡く薄くなつたと見ると、引合せた、袖を洩れる、眞白な手拭は、こはいかに見覺えた兎也矣。

「あれ、」と身を起して衝と立つて振返ると、小造なのも、少いのも、活々したのも、舊の如く、

「もう可いから此方へ、」と、爪尖に蔽のある淺い草鞋、春の雪のこぼるゝさまで、蓮歩を移す人に肖ない、大きさが過ぎて見ゆ。

風そよぎ、褄さきの揺るゝが如く前に立つて、凡そ道のほど十町ばかり、開いた扇の親骨の其一ツについて進むやう、湯湧谷の絶壁壁に袖摺り辿る細道は、横に岩一ツ、岩二ツ、四ツを隔てゝ、五ツを隔てゝ、今擬へた親骨の、其一本の遠のく如く、末ひろがりに歩一歩、谷川の流と次第に放れて、清風おもてを打つかとすれば、對岸早く一星輝き、弓形に夕の靄をかけて、縹渺として周圍一里、白銀の池の汀に着いた。巳代は一目見て市を去ること、百里なるべく推したが。

「お前寒くはないかい。」とはじめて振向いていつたのは、目のふちもほんのりと即ち活きたる人であつた。

「涼し過ぎますほどでございます。」

「あれ、御覽、此の松林の奥の方にはちら／＼と雪があるよ。」と活溌な身のこなしで、ひらりと居直り、扱帯に手拭をさしはさんで、巳代は村を放れてから、こゝにはじめて見た、松原の松のとある二

股の枝に、優しく縋らせてあつた、細い釣掉の眞中を取ると、恁ばかりの響にも、露ははら／＼と散つて、片手に取上げる根際の籠の小さな目から、松葉さへばら／＼ばら。

「露が酷いから密と潜つて、此方へ、此方へ、」

といひ／＼、ずん／＼平な大岩の上を行く。

巳代は疵ついた足の痛も覺えず、心地清々／＼しう、身も輕う、

「はい／＼、」と續くと、のどかに湛へた池の水の絡ひつく邊に、小さな圓座の如き筵を敷いたのに、草鞋をぬいだ足を乗せ、腰を下して無雑作に立膝して、手拭を下へ投げて、

「さあ、そこへお休み、可いから、可いから、」

といつて辭退するのをなほぱつちりとした目で進めらるゝ。

巳代は折返した上前の褄の端を其處へ、兩手を下げて畏つた。

麗人は坐ながら棹を上げて、絲を巻き戻しながら、おもりを放すと、さきのしなやかにしなふのを、仰

いで見つゝけ。

「心持が惡くはないかい。」

「勿體ないことをおつしやいまし、惡ゐどころですか、私は生れましてからこんなに身體の安々としたことはございません。唯おそば近で恐多う存じます。」

十三

「何をいふのだね、私の方がこんないたづらをして恥かしい、お笑ひだと厭だよ。」といふ時しも、衝と空に一條の線が描かれた、池には水音。

「一寸、綺麗な魚が取れるから御覽、暢氣なちのだらう、夏は恁う涼しいし、秋から冬になると谷の温泉が暖だし、友達はたんとあつても、可煩い人は一人も居ず、ほんたうに氣が清々するよ。」

「お可羨しうございます。」

機嫌よく、

「可羨しいかい、然う言へば彼の話をするのだつた、今！」といふ途端に棹が靡いて、衝と水面に伸ぴた細い腕は、前へ捻つた弱腰も堪らず、引入れられさうに強く張つて、右左にすら／＼と波を描くと見ると、遙に大きくなつて、名殘は暗き方に消ゆると同時に、水を放れてズツシり一跳、風を切つて泰然として、疾く麗人の白き掌に乘つたのは、尺に良足りぬ這は！　一尾の奇しき魚、其の形鮎に似て全身鱗滑かに、腹は丹の如く紅に、背は濃き緑に、其の紅を交へて、細き縞あり、頤また朱く、切り果

てぬ雫は、點々緑に紅に、岩に滴るかと疑ふばかり、艶なる状の飜つた時、巳代は翡翠が飛んだのだと思つた。

「まあ、何といふ美しい、」と我を忘れて差覗く、籠に入れたのを齊しく、見て、

「綺麗ね。」

「これは召食りますのでございますか。」

「應、否、爺やに遣るの、爺やが市に持つて行つて、兎でない、又これを欲しがる婦人に賣るの。」

「えゝ！」

「然うすると矢張此處へ來て、お友達になりますよ。澤山取れるから入るだけ取ると、あとで姉さんにもあげませうか。そしてね、お前の御主人の、あの、お雪さんはね、」

麗人は再び針を下したが、事もなげに片足を水の上に投げ出して、折敷いた片膝に、釣棹の端を壓へ、片手を背後につくと、右手を上げて形して、

「恁うやつて、煙草をのみながら、お前が据ゑたといふ芍藥の臺に、腰をかけてね、兎を抱いて居る内に、其處でさへ心持の可いほど邸が煩くなるにつけて、後朝川の水上の、此の湯の山の奥が、何とな

く可羨しくおなりなんだよ。
其處へ行合せたのが、橋向うに家を借りて居る、つい去年の夏、此の近道を通つて、故郷へ歸つた一人の騎兵なんだつて、爺やが話したつけ。
まあ、お聞き。
其の人は彼の三千里隔つた都の兵營で、射的の名人だつたさうだけれど、或時上官が部下のものを集めて、汝達は戰爭に出て死ぬことが出來るかと、尋ねたことがあつたさうな。唯戰のないのが殘念でございます、口で申すよりは、と皆が答へたのに、其の騎兵は言つたことが惡かつた。」
少時口を結んで、やがて聲靜に、
「私は唯兇器の動かないことを望みます、其は私が大切に思ひます或女性が、平和を望んで居りますから。しかし其の戀しい婦人のためにならば楯になつて倒れます。」
と膝の上にしかと十指を組んだ、細き指の尖は皆動いて、麗人は時に大空の星を仰いだが、面の色も蒼然と、
「然う言ひも切らない内に、あの其の騎兵の身體は大地に倒れて、三人の三ツの靴で蹈まれたさう

だよ。さあ、それからは、軍隊への見せしめと言つて、故と越度を拵へるやら、濡衣を着せるやら、酷いことの烈しい時は、倒にして打つたさうな。牢へ入れたことが、十幾度、」

物凄きまできら／＼と、瞳に星の映つたのは、天にあこがるゝ涙であつた。

「漏れ聞いた其の婦人は、三世に一度の果報を棄てゝ、何時までも／＼、行方の知れない身となつたんだつて。

世には未練な人があつて、其の行方を捜出さうと、心たうを尋ねに歩行く風説がある、お前の邸の客といふのも、そんな人かも知れないよ。」と冷かに一笑す。巳代は思ひ當ることがあつた、客といふは、當市出身の軍人で、都に名高き侯爵の姫を娶らうとして、志を得なかつた人物だといふから。

十四

「お前も知つておいでだらう、其の騎兵の内も舊立派な豪家であつたのが、然うやつて罪に罪をかさねたので、十年越、親はなし、留守を守るものもなし、親類縁者も悪いものばかり寄つたものだから、田畑も家も人手に渡つて、やう／＼去年。

ある方の御覽の時、射的の手柄で許されたが、故郷に歸つても住む家もないものだから、あゝやつて人の二階に、腕車を曳いて暮して居ると、此間途中で逢つた、お前の邸の逗留客に大勢おとものある中に、軍曹が一人居るね。

其が忘れもしないで顔を見ると、呀！　此の卑怯者、未だ活きて居るかと言つて、足をひとつ蹴つたんださうだよ。」

かた唾を呑むのみ瞻つて、口も利けず謹んで居た巳代は漸々、

「えゝ、其は私も存じて居ります、圍遊會とやら御馳走のありました其の當日、お庭の池のふちの大きな藤棚の下に、椅子を置いて、旦那様とお客様と、

おとものの其の軍曹とが、卓子を取巻いて、麥酒を召上つて在らつしやる、奥様も椅子にかけてお客の傍へ引寄せられて、旦那様の申つけでございますから、お酌をさせられて術なさうにしておいで遊ばした。私は軍曹の傍に立たせられて居りました時、手柄さうに、隊に居た、名は言はんでも卑怯者だといへば分る、車夫をして居るのに出つくはしたから、向脛を蹴折つてやつた。それは愉快ぢや、とお客と旦那とが申しますとね、戸長さんだの、區役所のお役人、學校の教員さんだの、皆折をさげながら、うろ／＼背後の方を取巻いて居りましたつけ、一時にどツと言つて、軍曹萬歳とやら申しました。あんな頓興な聲はお池の金魚だつて呆れます、岸の方に居た鴛鴦がさつさと遁げたのでございますもの。

可哀さうに、と奥様が、滅多に口をお利きなさらないのに、餘りだと思し召したか・然うおつしやいますとね、お客様が罰の當つた、突然奥様のお手をつかんで、君の細君にも似合はんことをいふ、こりや不可ん、三年ばかり我に貸さんか、心を撓め直して遣らうと申しました、内々／＼おべつかに奥様をお貸しなさいますやうな思召でもあつたのでございませ

う、御自分の奥様の手を握られたのに、厭な顔もなさいませんで、構はん、とおつしやいましたではございませんか。

直ぐにお立ちになりますと、又しても奥、奥と、私はもう、」

「あゝ、然うだらう、お雪さんは唯でさへ心の動いて居る處へ、其の騎兵がね。

其時は足に繃帯をして居たさうだよ。

痛めては稼ぎにも出られず、醫者にかゝることも出來まいと、先に榮えて居た頃の、檀那寺のお上人が貢いだお錢で、療治をしながら、唯居るでもあるまいと、古浴衣に帯などね、汗になつて汚れたのを、小桶に入れて、男だから、お前の内の花火が濟んで、橋の袂も、橋の上も、人が皆引込んだ時分に、婦人たちのするやうに、後朝川の柳の下で洗はうと、痛い足を引摺つて、橋手前の、あの、魚屋の前を通ると、フト賣殘つた鮎があつたとさ。

値を聞くと、魚屋が、これは鮎といふものぢや、車夫の菜にはならぬ、安くしてこれをやらう、何といふか名は知らぬが、美しくつて活きて居ると、掴出して其の人の目の前へ突出したのが、姉さん、此

の魚なの、」と籠の中を指示した、緑に朱の入つた魚は、麗人の早業に、既に三尾まで横たはつて居たのである。

「腹も立てないでね、大人しく、小桶の中に受け入れて、しよんぼりと橋へ來て、而して下りようとすると、あのね、葉柳の枝が茂つて、ひた／＼と淺瀬に觸るのが、まるで人が居て、晝間とおなじ洗ものをして居るやうに聞えたの。

此の音は向う岸まで響いて、お雪さんも耳を澄して居た。

處へ桶を抱へてね、遠慮深い人だから、柳の下は邪魔にならうと、流へ下りる石段は、お前の邸の裏にもあらう、其處でと思つて渡つて行つたんだよ。

（もし、）

男は吃驚して見ると暗夜だのに、後朝川の川水が、縁のある目に映したのか、美しい奥様だもんだから、唯恐入つて不遠慮の詫をした。」

十五

「いゝえ、お通り遊ばしたのを、お咎め申したのではないのでございます。殿方の身でお氣の毒な、私が一寸すゝぎ出してあげませうと、人がことわるとは思はぬほど、眞心で然う言つて、直ぐに煙管を置いて、兎を膝からお下しだもんだから、男は思ひも寄らないことで、唯うろたへるのを。

何も御遠慮遊ばすには及ぴません、お腹をお立てなさいましては惡うございますけれども、水いぢりがして見たう存じますから、宜しくばお貸しなすつてと、然うまで言はれるのに斷りかねて、おづ／＼渡したのを取つて、段を下りて、まあ、お生れなすつてからはじめてのお洗濯。

桶の中からさつきのお魚が、ばツと水へ、鱗がきら／＼と光つたのに、お驚きの拍子、浴衣が一枚手にも留まらないで流れたの、薄汚れたのを一枚なんぞ、絽や紗に代へても金ならばと、思ふやうな人ではない。

あれ、何うしませう粗相をと、跣足のまゝ駈け上つて、川沿に下の方へ浴衣を追ひかけておいでだから、わく／＼して立つて居た、男も跟いて飛出して、橋詰から五六町。流は早し、たよりは惡し、迚もとあきらめて、お雪さんも石のやうに立つてお了ひ。

わづかの間にお前の邸の、あの髯が、方々捜して歩行いたらう、醉つちやあ居るしよろ／＼と、裏口から出て來たのがお雪さんの腰を懸けて居た、芍藥の臺と煙草盆、見覺のある煙管ばかり、赫となつて、威さうとでも思つたか、煙草盆ぐるみ其の臺を、石垣下へ蹴落して、庭へ荒込むと突然凄い音をさして、他に類のないほど巖乗な銅張のあの扉を、唯、天に響けとドンと閉めた。

姉さん、分つたかい、其あとへ引返した二人の人は、何うするとお思ひだい、叢に密んで待つた、兎が袖に飛縋つて、もう死なうと覺悟をなすつたお雪さんに何んなことを教へたらう。

ひる頃休んだ劍村の茶店から此方へ、軍曹は來ることが出來なかつたことを覺えて居ませう、騎兵が一人と、其の鐵砲が一挺、お雪さんと一所に亡くなつたことを知つて居ては、迚も此の邊へは寄りつか

れぬ、千枚岩の入口で、お前其の音を聞いたのねえ。
二人は無事でおいでだから、些とも案じないが可い、是から里へ歸るのなら、可哀さうに、お前の身體に迷惑のかゝらないやうにして上げませう。

それとも、最う歸らないで、此處に私たちと居る氣なら、お雪さんに逢はせた上、温泉に入つたり、釣をしたり、月夜には劍村まで岩の上を歩行いたり、獣を撃つたり、鳥を獲つたり、皆で色々なことをして遊ぴませう。
何うするの。
私は恁う暢氣だけれど、お雪さんは未だ浮世のことが胸にあるから、歸るお前には逢はされない、居るつもりなら介抱をしてあげておくれ、何うするの、姉さん、」と優しいながら屹として、いふ言皆諚の如く、動かし難う取らるゝので、巳代は口籠つて、とつおいつ。
一途に思詰めては來たけれども、再ぴ里に出ぬことは決しなかつた、先刻にはものに激したれば、死を急いで顧みなかつたが、渠には親も兄弟もあつて、

なほ且つ人の情を汲知るものゝ、自分にも意中の人のある身であつた。

といつて、親よりも、兄弟よりも、意中の人よりも一層懐しく慕しい、令室に、唯一目の、其の初一念も仇にはならず。

心一ツに定めかねて、唯差うつむいてとむねをついて、氣をあせる恰も其時。

老鶯がほうほけきよーほうほけきよーと前後二聲、優しき音を此の仙境に入れたのを聞いた。

其の鶯の人里戀しく、身はたゞ家路を數千里の外に隔つやう覺ゆるにつけても、そゞろに涙さしぐまれて、嗚咽してものさへ得言はず。

其志既に傾けりと、星を宿す目に認めて、頷いて、

「あゝ、可し、可し、案じずにお歸り、」と言ふ聲怒を帶びて聞えたが、

「もう來ちやならないよ。」と氣色やゝ變りつゝ、幻の一際艶に、氣高く、尊く、星を頂いて衝と立つた、裳を裏む夜の色、大池に背さしむけ、釣棹のさきをかへして、湯湧谷を切立ての、宇宙を蔽うて仄かに黒き、巖の板をコト／＼と叩いて、

「爺や、爺や、爺や、」と三聲。

「應、」と地の底に響く聲、巖横ざまに颯と開けて、雪賣の親仁のつしりと出て、麗人の足許にうつ向き伏したる、巳代の帯際を其まゝ抱へて、再ぴずばと巖に消えた。

巳代は抱かれたと思ふと同時に、地の上に差置かれたが、目を開いて、後朝〳〵川の岸、事へる邸の土塀の際、彼の夫婦松の根なる處に、女仙に侍して我ながら骨は玉に、膚は氷に化せしと思つた一瞬時前の己に似ず、身の内ゆるみ、顔あつく、耳ほてり、手足はしとゞ汗ばんで、衣は破れ、袖は裂け、帯に泥つき、裳亂れて、引纏うたる紅の、取亂して淺ましく、倒れて居た膝を見て、身を恥ぢながら茫然となる。

背後から、しぴれよとばかり、脊筋のたうを丁と打つて、

「畜生め、何處へ、」といつたのは、意地惡い年増の女中であつた。

これより前、自然の冷に呼吸を返して、千枚岩から、劍村に引返した巡査は、土間にのめる、と蟲の呼吸。

やがて言ふことが夥しい、何程の人數籠りしやらむ、四邊を蔽ふ雲の中に、つるべ打つ鐵砲其の幾挺なるを計り難く、人質同然の巳代をさへ奪取られをはんぬと。

執事と軍曹これに聞怖をして、兩名、巡査を助けて引返し、朝六つの邸の廣庭に畏つて、復命すると、驚破もりかへせ、繰出せと、八方へ分れた人數一絡にして、四五十人、路すがら人夫を狩れやで、犇めいて、裏表の門から渦いて出る、丁ど日が暮れて間の無い頃。

此處へ件の年増の女中、土塀下に建腐の遊女屋の門から出て、夫婦松の根に倒れて居た、空蝉の媚かしいばかりの巳代をずる／＼と引摺來て、燈臺下暗しと、いきまいたり。

然ればこそ、令室は其の古家に隱れて居るは、と使命を辱めたる軍曹眞先に、巡査も恁と聞いて立直り、執事がついて七八人、どや／＼と門の戸を、内へ倒して、釘を踏むな！　床、縁、敷居の朽ちたのを土足のまゝ、古疊に煙を立て、戸障子を亂離にして、間毎々々に二人三人づゝ立分れながら込入つた、部屋の數凡そ荒らし抜いて、愈々暗い中を眞一文字

に踏み込むと、不思議や開戸が一枚、柱との合せ目に、新しい鐵砲が一挺。

多勢を力に、手に手に提灯をさゝげたが、左に四枚、右に四枚、此處ばかりは襖も揃つて、疊の目一ツ摺剥げもせぬ、襖に描いた、墨繪の山水の、雨もりに染みながら、誰が筆ならむ、其の墨のあとの認め得らるゝのを、巡査はとくと見て身顫をして退つたのである。

千枚岩の眞景であつた。

軍曹は然りとも知らず、遠くから及び腰に、ソツと鐵砲を取退けると、打つものがない飛道具は因より音もせず煙も見えぬに、恐しく強くなり、當夜當手の一番乗と、ずらりと開くと押入の、ものゝ上を、辷つてする／＼と解れて出たのは、一條媚かしい扱帯。

ト下に鴛鴦の羽を重ねたやう、美しく積まれた一重の絹の夜具、しやにむに紅の袖口から引摺り出さうと突込んだ手に、人肌の暖かさ、ふつくりとしてこたへたので、言語道斷と、喚いて掴み上げると何にもない、然も風にあたると、はら／＼と切れて、裂々に裂けてばつと散つた。

一同は唾を呑んだが、押入の中は他に突當りの眞黒な壁ばかり。

すぽりと天窓から中へ入つて、軍曹は大の字形、地蜘蛛のやうに附着いて、天井を押上げ、羽目を剥いで、顔を押あて、中を覗いた、トタンにキヤツと叫んで仰向けに倒れ、額を兩手で押へたが、指の間からたら／＼と鮮血が流れた。これで一同は引返すことになつたが、いづれも古釘などの突出たので、暗まぎれの怪我といふのであつたが、軍曹は、中に得もいはれぬ美しい婦人が居て、黒髪を前へ下げて、髻を握りながら解かして居たのを、透かして一目見るや、氣高い顔で磴と睨め、手にして居た其の梳櫛のさきで、突かれたと、譫言を言ひ／＼、長に失心したのである、巡査も今は亡き人の數に入つた。

巳代は三年の後に籠の鳥、緑の襠、紅の襦袢を纏ふ身に成つた、恁くて朝な夕な、湯の山の空を打視め、欄に凭り、簾を巻いて、果敢なく雪賣の爺の姿をのみ待つ。

土地の博士齢八十路に餘りたるが、これを聞いて

評すらく、湯湧谷には女仙多し、但其の白き兎を放ちたると、美しき魚を弄びたると、本地相同じきや否やを知らずと、若き男女は、緑に朱のひだの入つた水上の状、大空の白い曇のたゝずまひも、あだには見過さぬ。

【完】